

タイトル	ブルースのアイランド侵略：その目的をめぐって
著者	常見，信代
引用	北海学園大学人文論集，23・24：87-120
発行日	2003-03-31

# ブルースの 아일랜드 侵略

— その目的をめぐって —

常見 信代

## はじめに

1315年5月26日に、エドワード = ブルース (Edward Bruce) の率いる軍団がアルスター北東部にあるラーン (Larne) 近くに上陸した。エドワードは、スコットランド王ロバート1世 (Robert Bruce, 在位 1306-1329) の弟で、この1か月ほど前にロバート1世の推定相続人 (heir presumptive) に指定され、ロバート1世に男子がいない場合にその王位を継承することになっていた。そのエドワードとその軍が上陸後にアルスターを占領し、この時から1318年10月14日にフォート (Faughart, Fochart) で敗戦するまでの間、アルスターを基地に4回にわたってアイルランド中部や西部に軍事遠征をおこなった。この間にエドワードはみずから「アイルランド王」を名乗っている。また、1317年1月にはロバート1世がこの遠征に加わり、マンスター西部にまで進軍している。

ブルースのアイルランド侵略は、アイルランド中世史の中でもっとも研究されてきたテーマの1つといわれ<sup>1)</sup>、「イングランドによるアイルランド支配の転換点」あるいは「ゲールの復興」の契機に位置づけられてきた<sup>2)</sup>。近年では、B・スミス (B. Smith) によるラウス (Louth) に関する研究のように、ブルース軍の遠征に対する地方住民の対応など地方史レベルで綿密な研究が進んでいる。これに対してスコットランド中世史の分野では、アイルランド侵略に関する個別研究はきわめて少ない<sup>3)</sup>。多くは概説的に触れられているにすぎず、侵略の目的やその意義について概してスコットランド史家は寡黙である。

アイルランドでは、地域によっては甚大な被害をこうむり、また、以下の事実経過であきらかなように、ブルースの侵略がアングロ・アイリッシュに与えた脅威はきわめて大きかったから、この問題がアイルランド中世史の重要な研究対象になるのは当然といえる。しかし、スコットランド中世史研究にとっても、アイルランド侵略を含めた独立戦争期(1296-1328)はおおいに研究されてきた分野の1つであり、なかでもロバート = ブルース(ロバート1世)については、その中心人物としてその動向は詳しく研究されてきた。G・W・S・バロウ(G.W.S. Barrow)の『ロバート = ブルースとスコットランド王国共同体』は、そうした研究の決定版として高く評価されている著書であるが、その中でバロウは「(1314年の)バノクバーンから1329年の死亡までの15年間にロバート1世みずからアイルランドにかかわったのはわずか数か月にすぎず、スコットランド軍がアイルランドで行動したのは3年にすぎない」と述べている<sup>3)</sup>。つまり、アイルランド侵略はスコットランド王国の政策としてそれほど比重を占めるものではなかったと評している。ただし、このような見方は、バロウに始まるものではなく、既に14世紀後半の著作に認めることができる。たとえば、1370年代に書かれた叙事詩『ブルース』の中で、J・バーバ(John Barbour)はアイルランド侵略が失敗に終わった原因をエドワード = ブルースの過剰な自尊心と傲慢さに求め、その責任をエドワードひとりに負わせている<sup>5)</sup>。

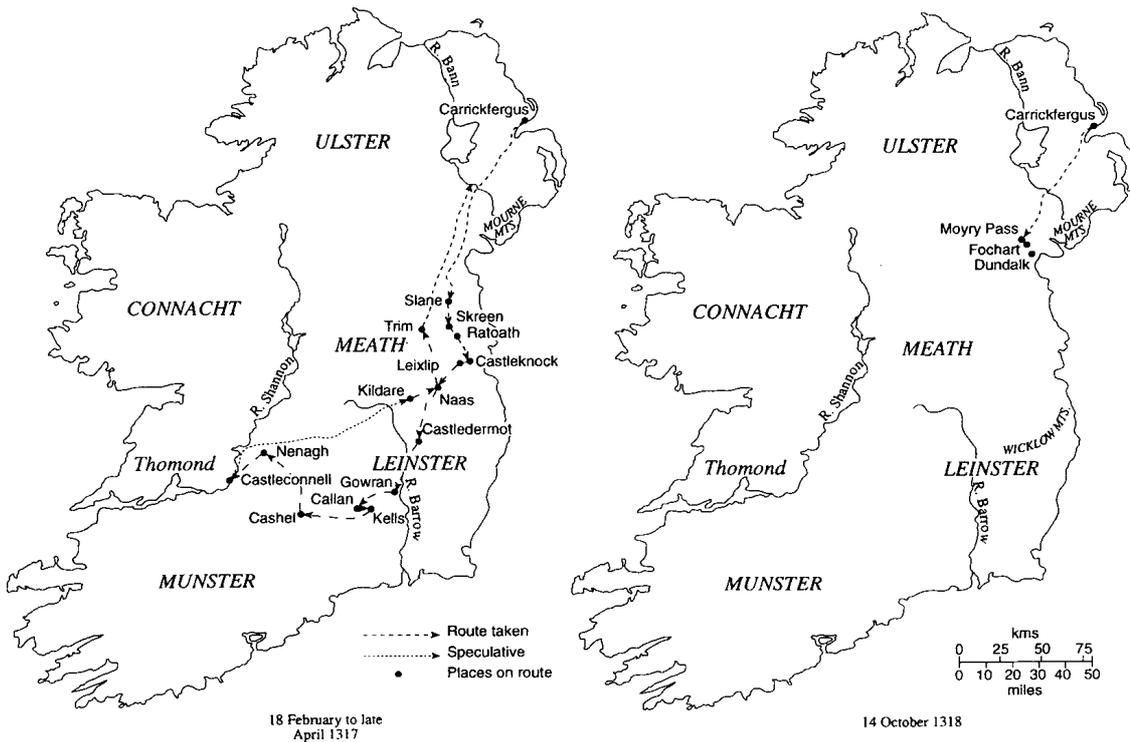
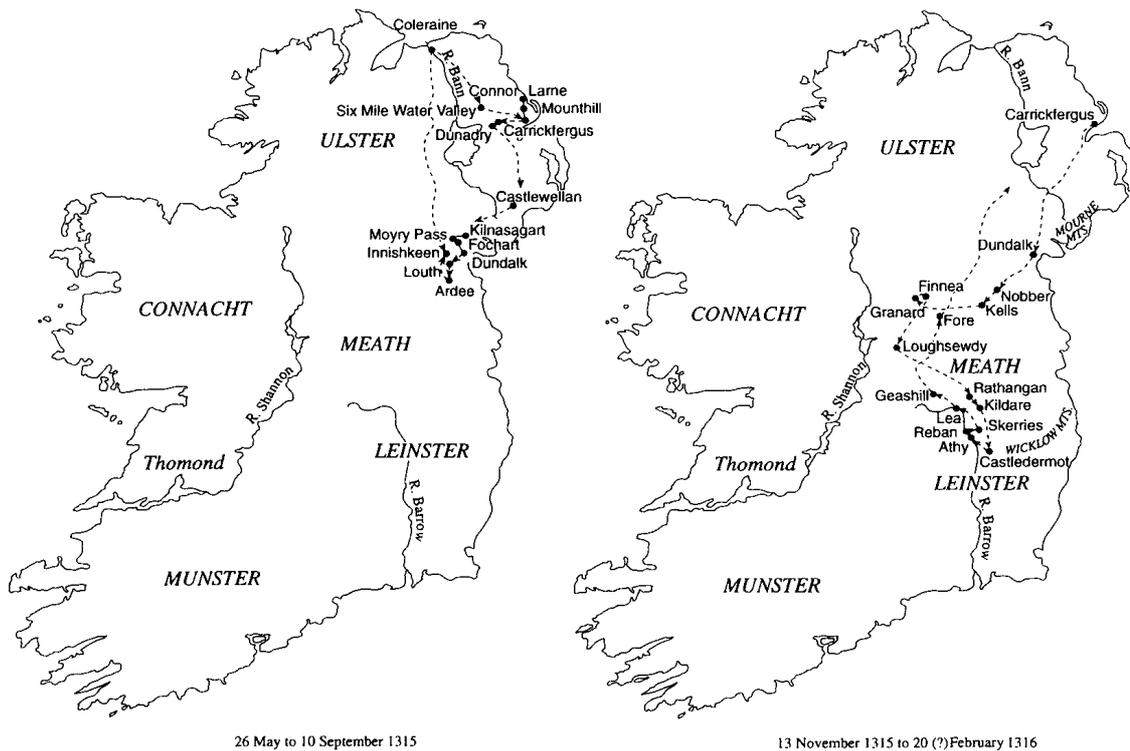
研究史のこのような現状を踏まえ、筆者はブルースのアイルランド侵略を当時の状況の中で再検討すべく、その予備作業として別稿においてロバート1世のアイルランド宛書簡およびエドワード = ブルースのウェールズ宛書簡などを検討した。その結果、アイルランド侵略に先立ってスコットランド側がアイルランドやウェールズに対して盛んに反英戦線の結成を呼びかけていた事実を確認した<sup>6)</sup>。本稿は、その続編にあたり、ブルースによるアイルランド遠征の事実経過を可能な限り同時代史料に基づいて紹介し、ついで、侵略の目的について考察するものである。

## 1 アイランド遠征

ブルース軍による4回のアイランド遠征については、アイランドの年代記がかなり克明にその動きを記録している。特に、ダブリンの聖メアリ修道院の年代記はブルース軍と総督（justiciar）をはじめとするアングロ・アイリッシュの動向について、『コナハト年代記』や『イニスファレン年代記』などゲール系の年代記はブルース軍とアイリッシュの動向について、それぞれ詳しい<sup>7)</sup>。さらに、1315年7月にエドワード2世がアングロ・アイリッシュ諸侯30名に書簡を送り、ブルース軍の動きとアイランドの状況を知らせるよう命じているが、これに対する報告が11通、残存し、第1回遠征に関する貴重な証言となっている<sup>8)</sup>。また、同年11月にJ・ホサム（John Hothum）が国王特使としてダブリンに着任し、彼とその下僚が翌年2月にブルース軍の第2回遠征に関する詳しい報告書を送っている<sup>9)</sup>。一方、第3回遠征についても、総督E・バトラ（Edmund Butler）がブルース軍の進む先々で徴募した兵士への支払記録が残存し、R・フレイム（Robin Frame）によって分析されている<sup>10)</sup>。年代記に加えてこれらの報告書や記録に基づきながら、この節ではブルース軍による4次にわたるアイランド遠征の概略を紹介したい（地図参照）。

### 1) 第1回遠征

1315年5月26日に上陸したとき、バーバによればブルース軍の兵士は6,000人とされ、『コナハト年代記』によればこれらの兵士は300隻の船に分乗していたという<sup>11)</sup>。これらの数字には誇張があろうが、いずれにしても相当な規模の軍勢であったと思われる。ダブリンの年代記は、エドワード＝ブルースの同行者として、ロバート1世の片腕たるマリ伯T・ランダルフ（Thomas Randolph, earl of Moray）やJ・ステュアート（John Stewart）ら7名のスコットとともにアルスターのグレン地方（the Glens of Antrim）の領主J・ビセット（John Bisset）の名前をあげている<sup>12)</sup>。ビセットについては、第2節で検討するが、侵略にアルスターの領主が加わって



The Bruces in Ireland

Atlas of Scottish History to 1707, ed., by P.G.B.McNeill, Edinburgh, 1996, p. 101

いたことに注目したい。

ブルース軍の上陸当時、アルスター伯リチャード = ド = バーク (Ri-

chard de Burgh) は領地のあるコナハトにいて、伯領は代官のトマス = ド = マンデヴィル (Thomas de Mandeville) に委ねられていたが、侵入を知ってトマスがダブリンに逃れたため、ブルース軍は大きな抵抗もなくアルスターを占領した<sup>13)</sup>。その後、ただちに南へと進軍して6月15日にダンドーク (Dundalk) の町を占拠し、さらにラウスへと進んで破壊と略奪を重ねている<sup>14)</sup>。しかし、総督がマンスターやレンスターから召集したアングロ・アイリッシュ諸侯の軍とアルスター伯がコナハトから動員した軍とが7月22日にダンドークに集結すると、これを知ってブルース軍はドーナール = オニール (Domnal O'Neill) らアルスターのアイリッシュの助言で戦略を変更し、北へ撤退を始めた<sup>15)</sup>。アルスタ伯の軍だけがこれを追跡し、結局9月1日または9月10日にアルスター北部のコナー (Connor) で両軍が合戦してブルース軍が勝利し、第一回遠征は終わった<sup>16)</sup>。

ところで、第1回のアイランド遠征が行われた1315年秋からエドワード = ブルースが戦死する1318年秋までの期間は、中世の西ヨーロッパが経験した中で最悪といわれる凶作・飢饉の時期に重なった。ブルース軍の進む先々で略奪・焼き討ちが繰り返されたのは食糧確保のためでもあった。もっとも、ゲール系年代記によれば、「殺人を除けば、ブルース軍と戦うためにアイランドのさまざまな地方から集められた軍隊が行った行為は同じぐらいに悪い」、あるいは、「アルスター伯の軍とブルース軍が通過した後には、草一本残されておらず、納屋も教会もすべて焼き払われた」という<sup>17)</sup>。

## 2) 第2回遠征

コナーの勝利の約2か月後の11月13日にブルース軍はキャリックファergus (Carrickfergus) を出て第2回の遠征に向かっている。まず、11月末には再びダンドークを襲い、ここでマリ伯がスコットランドから率いてきた500名の兵と合流し (11月30日)、ミーズ (Meath) へ、さらにレンスターへと進軍している。この間、ケルズでミーズの大領主であるロジャ = モティマ (Roger Mortimer) との小競り合いに勝利し (12月6日)、

さらにクリスマスにはミーズのもう一人の大領主ヴァードン家 (de Verdon) の所領 (Loughsewdy) を占領してその食糧を食い尽くし、レンスターでもバーミンガム家 (de Bermingham) やジョン = フィツ = トマス (John fitz Thomas) らアングロ・アイリッシュの有力領主の所領を襲って略奪と焼き討ちを繰り返している。なお、ブルース軍がミーズからレンスターに進軍するにあたっては、ラーシ家の兄弟2人 (Hugh, Walter de Lacy) が道案内したとされ、2人は後に告発されている<sup>18)</sup>。

一方、ブルース軍がレンスターに向かうと、ブルース軍と戦うために集結するようアイルランドの領主に対して総督が国王令状を送付したが、国王特使J・ホサムもモティマの敗北に危機感を深めて自身の名前で書簡を送って集結を要請している。この召集に応じてレンスターおよびマンスターのアングロ・アイリッシュ諸侯8名が騎士と歩兵そしてアイルランド特有の軽装騎兵 (hobelers) を従えて集結し、1月26日にスケリズ (Skerries) 近郊でブルース軍と対戦した。戦いの結果について、ホサムは「十分すぎる兵士の数から勝利は確実であったが、不運な出来事 (par mescheance) によって戦闘を続けることは出来なかった」と報告している<sup>19)</sup>。どのような出来事なのか、ホサムは何も述べていないが、年代記によれば、「諸侯の間で対立 (discordia)」が起き<sup>20)</sup>、「総督軍の戦死者5名、ブルース軍の戦死者70名<sup>21)</sup>と圧倒的に不利であったにもかかわらず、ブルース軍は敗北を免れ、2月末までにアルスターに撤退している。

### 3) エドワード = ブルースの即位

ブルース軍がアルスターを出て第3回の遠征に向かうのは翌年の1317年1月で、第2回遠征からほぼ1年後のことである。この1年間の動きとして、上陸直後から攻囲戦を展開していたキャリックファーガス城が1316年7月から8月に陥落し、これ以後ブルース軍の拠点になったことが知られている<sup>22)</sup>。また、多くの研究者がエドワード = ブルースのアイルランド王に即位した時期をこの間の1316年5月1日としている<sup>23)</sup>。しかし、この説は年代記の恣意的な解釈に基づいたものといえる。なぜなら、即位につ

いて記しているのは『コナハト年代記』とダブリンの年代記であるが、エドワード = ブルースの即位は、いずれも 1315 年の項に記されているからである。ただし、月日が記されているのは後者の年代記だけで、1315 年の「聖フィリップと聖ヤコブの祭日」（5 月 1 日）のこととされている。ところが、この日にブルース軍はまだ上陸していない。このため、2 つの年代記を 1316 年の誤記と解釈し、1316 年 5 月 1 日説が受け入れられてきたのである。しかし、性格の異なる 2 つの年代記がそろって 1316 年を 1315 年と誤って記したというのも不自然である<sup>24)</sup>。また、1315 年秋にアングロ・アイリッシュ諸侯の送った報告の多くは上陸後エドワード = ブルースがアイリッシュに受け入れられていると書いていることから、上陸後の早い時期にアイランド王に即位したと推測される。一方、即位の場所については、同時代史料に言及されていない。これまで 1318 年にエドワード = ブルースが戦死したフォートが即位の場所とされてきたが、次節で紹介するように、その論拠となったゲール語の文献が捏造文書であることが近年、論証され、フォート説は否定された。現在のところ即位地は不明といわざるをえない<sup>25)</sup>。

「アイランド王」としてエドワード = ブルースが発給した公文書そのものは現存しないが、ロバート 1 世の勅許状など、4 点の同時代史料の中に「アイランド王エドワード (Edwardus Rex Hiberniae)」の文言が認められる。その 1 つ、1316 年 9 月 30 日付のロバート 1 世の勅許状は、エドワードがこの時期にスコットランドに帰国してマリ伯 T・ランダルフに対するマン島の授与に立会い、その同意の保証として「アイランド王エドワードの印璽」が勅許状に添付されたことを伝えている<sup>26)</sup>。当時、マン島はイングランドに奪取されており、マリ伯がこれを奪回すればという条件付ではあるが<sup>27)</sup>、勅許状の文面から、また、エドワードを帰国させていることから、マリ伯への授与がスコットランド王国にとって重要な意味を持っていたと推測される。この問題を考える上で手がかりとなるのがアイランド侵略に先立ってエドワードがアイランドに送った書簡である。エドワードは、アイランド王になるとともにマン島を初めとする「島嶼地帯

の征服者」となってアイルランド王国にこれらの地帯を加える予定であると語っているからである<sup>28)</sup>。

マン島は、ブリテン西部とアイルランドとを結ぶ要衝に位置し、古くからその水軍はアイルランドやスコットランド、イングランドの支配者の重大な関心を集めていた。アルスター植民をおこなったジョン＝ド＝コース（John de Courcy）が12世紀末にマン王家と姻戚関係を結んだのも、この島の重要性を認識してのことであった<sup>29)</sup>。特に独立戦争前後には、マン島をめぐるイングランドとスコットランドが激しい攻防を繰り返した。それは、イングランドにとってこの島はアイルランドとカーライルを結ぶ海上基地であり、スコットランドにとっては王国防衛の上で死守しなければならない島であったからである。そのため、1290年にイングランドに奪われたこの島を、1313年5月にロバート1世みずから遠征して奪い戻している。しかし、アイルランド侵略の直前の1315年1月に、ロバート1世の宿敵であったコミン派の残党のひとりジョン＝マクドゥゴール（John MacDougall, John of Argyll）がイングランド王の命を受け、ダブリン政府の支援のもとでこれを再び奪取し、他方でスコットランド側のトマス＝ダン（Thomas Dun）がこの島周辺で海賊行為を繰り返すなど、アイリッシュ海の緊張が続いていた<sup>30)</sup>。

このような状況から、ロバート1世はアイルランド侵略とマン島征服とを分離して、より緊急を要する後者の任務をマリ伯に委ねようとしたのであろう。これは、エドワード＝ブルースの計画を大きく変更させるものであったから、あえて帰国させてその同意を記録にとどめ、その保証として「アイルランド王の印璽」を添付したと推測される。1316年12月末にロバート1世とマリ伯が大軍を率いてアイルランドに上陸し、エドワードと合流して3回目の遠征をおこなっているが、エドワードが帰国したとき、アイルランドについて何らかの協議がなされ、マリ伯にマン島を授与する代償としてロバート1世みずからアイルランド遠征に赴くことが約束されたと推定される<sup>31)</sup>。11月初めにアルスターでは、ブルース軍の兵士300人がアングロ・アイリッシュによって殺され、12月にはエドワードの片腕の

ひとり A・ステュアート（Alan Stewart）が捕らえ、ダブリン城に投獄されている<sup>32)</sup>。戦局は一段と悪化し、早急の支援が必要な状況になっていたと推測される。

#### 4) 第3回遠征

1316年の年末にロバート1世やマリ伯が援軍とともにアルスターに上陸し、翌年の1月から2月初めにかけてエドワード＝ブルースとともに第3回遠征をおこなっている。2月16日頃、ミーズのスレーン（Slane）近くに到着したとき、ブルース軍の総勢は2万ともいわれる<sup>33)</sup>。またもや飢饉のあとの真冬の遠征で、略奪と破壊を繰り返し、アルスター伯の居住するラトゥス（Ratoath）を攻撃した後、これまでの遠征の中ではじめてダブリン近くに迫っている。このため、ダブリン市内はパニックとなり<sup>34)</sup>、市壁の補強など防衛の強化を進めるとともに、ブルース軍が近づかないように市壁の外一帯を焼き払う措置が取られたという（2月23日）<sup>35)</sup>。しかし、結局、ブルース軍はダブリンを攻撃せず、レンスターからマンスターへと向かい、その途上で総督E・バトラの所領（Nenagh）を襲い、4月初めにシャノン川流域に到達している<sup>36)</sup>。

ブルース軍が一路マンスターを目指したのは、ソモンド（Thomond）のオブライエン族のひとりドナフ＝オブライエン（Donough O'Brien）が北に来てソモンドに来るように懇願したためである。ブルース軍が来れば、すべてのアイリッシュが蜂起するから、南西部諸州を支配下に置くことができる」と説得したという<sup>37)</sup>。一方、ブルース軍がダブリン郊外から南へと進路を変えた頃から、総督はブルース兄弟とドナフとの接触を知って目的地はマンスター西部と確信したのであろう。先回りしてティペラリー（Tipperary）にある自己の領地にむかい、そこで30名の重装騎兵（*hominibus ad arma*）を計1ポンド10シリングで雇い入れ、これ以後、ブルース軍の進軍する先々で兵を徴募している。しかし、総督軍は、ブルース軍と多少の小競り合いをただだけで戦闘を回避し、アイリッシュと接触しないように牽制しながら西へ追い込む作戦を取っている。総督の雇った

兵士の数は、3月中旬までは計50人から300人ほどであるが、ブルース軍がキャッシュル(Cashel)に進んだ後は500人、さらにシャノン川に近づいた4月上旬には920人と急激に増加している<sup>38)</sup>。

ブルース軍が4月初めに、「全アイリッシュの結集した軍と合流するつもりで、シャノン川流域に着いた」ところ、その対岸で待ち伏せしていたのはドナフと対立するオブライエン族の長ムアタフ(Murtough O'Brien)とリチャード＝ド＝クレア(Richard de Clare)らのアングロ・アイリッシュ諸侯および総督軍からなる連合軍であった。ムアタフは、これまでリチャード＝ド＝クレアとは敵対関係にあったが、ライバルのドナフがブルース兄弟と結んでソモンドに進軍しているのを知ると、ド＝クレアと共同戦線を組んで政府軍の一翼を担った<sup>39)</sup>。要するに、ブルース軍はオブライエン族の内部対立に巻き込まれ、ドナフのライバルを打倒するための軍事力として利用されたのであった。期待した「全アイリッシュの蜂起」もなく、結局、10日近くならみ合っただけで戦闘を交えることなく、ブルース軍は5月1日にアルスターに撤退している。

ブルース軍の撤退を決定づけたのは、ロジャ＝モティマが国王代理として本国から軍を率いて到着したとの知らせであった。1316年の秋頃からイングランド政府がアイルランドの事態にはじめて本格的な関心を示し、10月に「反逆者エドワード＝ブルースに対処するために」ダブリンの財務長官に100ポンドを支給することが承認され、12月にはジェノヴァから1,000人の兵を雇う取り決めがなされている<sup>40)</sup>。ただし、傭兵隊がアイルランドに到着することはなかったが。また、第3回遠征が始まった1317年1月には、アイルランドに土地を有するすべての者に対して防衛のためにアイルランドに赴くよう命令が出されている<sup>41)</sup>。モティマの派遣もこのような対応策の1つで、ブルース軍とのならみ合いの続いていた4月7日に、南部のヨール(Youghal)に上陸し、総督軍と合流すべく西に向かっていった。しかし、モティマは、ブルース軍が撤退を始めると、これを追跡させることもなく、みずからは所領のあるミーズに急行し、この地方の領主であるジョン＝ド＝バーミンガム(John de Bermingham)やニコラス＝ド＝

ヴァードゥン（Nicholas de Verdon）の力を借りてラーシー族の処罰と追放に専念している<sup>42)</sup>。

第3回の遠征後、ロバート1世とマリ伯は1317年5月末にスコットランドに帰国した。エドワード＝ブルースは、1318年10月までの間アルスターに留まっているが、その1年半の動向について記した史料は皆無に等しく、ほとんどわかっていない。わずかに、ダブリンの年代記にブルース軍が「カニバリズム」に陥っているという記述があり<sup>43)</sup>、アルスターに撤退したブルース軍にとって食糧事情は依然として厳しい、あるいは一層厳しい状況にあったと推測される。また、エドワードの同盟者ドーナル＝オニールが教皇ヨハネ22世に‘Remonstrance of Irish Princes’を送付したのも、第3回遠征後の1317年の夏頃と推定されている。

‘Remonstrance’は、イングランドの支配によってアイルランドの自由がいかにか抑圧されたかを詳細に記した告発文の一種であるが<sup>44)</sup>、ブルースのアイルランド侵略とのかかわりで注目されるのは次の2点である。その第一は、冒頭で発信者のドーナル＝オニールがみずからを「世襲権によってアイルランド全土の真の相続人」と称し、‘High-kingship’の継承者であると主張していることである。これは、アイルランドにおけるエドワード＝ブルースの支持基盤を狭める恐れのある主張である。なぜなら、アイルランドには地方的に複数の王が存在し、彼らもまたオニールと同様にみずからを「アイルランド全土の真の相続人」と主張し、対立しあっていたからである。つまり、ゲーリック・アイルランドにおけるエドワードの支持者は、オニールを「全アイルランドの真の相続人」と認める人びとに限られてしまうからである。第二は、‘Remonstrance’の結論部分で、アイルランドの自由を取り戻すためにエドワード＝ブルースを招き、「アイルランド全土の真の相続人」としてオニールに属している一切の権利を彼に譲り、「全員一致でエドワード＝ブルースをわが王国の王に擁立した」と主張していることである。次節で紹介するように、この主張がブルースのアイルランド侵略は「ドーナル＝オニールの要請」によるものという定説の根拠の1つとなった。しかし、この主張は、エドワード＝ブルースの同

盟者として行動していることに対する弁明のためのものであり、オニールが1315年5月のアイルランド侵略そのものの首謀者であることを裏付けるものではない。

### 5) フォートの敗北

エドワード = ブルースの動向が明らかになるのは1318年10月14日のことで、彼の戦死についてである。アルスターを出て4回目の遠征にむかう途上のことで、ダンドークの町近くのフォートにおいてジョン = ド = バーミンガム指揮するラウスおよびミーズから集結した軍と戦い、ブルース軍は壊滅した。エドワード = ブルースの首は、ジョン = ド = バーミンガムによってイングランドに運ばれてエドワード2世に献上され、一方、遺体は四つ裂きにされてダブリンその他の町に送られ、市中にさらされたという<sup>45)</sup>。ちなみに、フォートの勝利は、エドワード2世が手にした最初の軍事的勝利であり、結局は最後の勝利となったものである。ジョン = ド = バーミンガムが翌年の春にラウス伯に任ぜられたのを筆頭に、フォートの勝利に貢献したミーズやラウスのアングロ・アイリッシュがエドワード2世から前例のないほどの恩賞を与えられている<sup>46)</sup>。

エドワード = ブルースの戦死は、アイルランドに限らずブリテン各地の年代記などに記されている。まず、ダブリンの役人のひとは、戦場からの報告が届くと、公文書の1つに「大勝利」と記し、「神の正しき導きと人びとの働きによって神のしもべは、ついに隷属から解放された」というコメントを書き込んで解放の喜びを後世に伝えた<sup>47)</sup>。また、教皇ヨハネ22世がエドワード2世に書簡を送ってアイルランドにおける勝利について祝意を表している<sup>48)</sup>。一方、イングランドの年代記は、アイルランドの出来事にあまり言及しないのが通例であるが、フォートの戦いについては多くの年代記がこれを取り上げ、偉大なる勝利と称えている<sup>49)</sup>。これらの例は、アイルランド侵略がいかに当時の人びとに脅威あるいは重圧感を与えていたかを示す証左といえよう。

## 2 侵略の目的をめぐって

エドワード = ブルースによる 아일랜드 遠征については、前節の冒頭で紹介したように年代記や書簡・報告書などがかなり克明に記録しており、その事実経過の大半があきらかにされている。ところが、そもそもブルースの 아일랜드 侵略は何を目的にしたのかという問題になると、以下で紹介するように、R・フレイムは「征服」をあげ、J・ライドゥン (James Lydon) は「対イングランド第二戦線」説を唱えるなど、研究者の見解は必ずしも一致していない。さらに、最近ではスコットランド史家のC・マクナミィが「ブルース兄弟の 아일랜드 への介入は、彼らがかかわった戦争の中でもっとも奇妙な戦争」であり、「多くの研究者を引きつけてきた問題であるが、いまだに権威ある解釈があらわれていないのも驚くべきことではない」とまで述べている<sup>50)</sup>。そこで、同時代史料の中から 아일랜드 侵略の目的にかかわる部分を取り上げ、当時の状況の中でこれらの問題を検討したい。

### 1) 아일랜드 侵略の主導権

ア일랜드 侵略の目的を考えると、そもそもこれを計画したのは誰か、ア일랜드 側が要請したのか、スコットランド側が持ちかけたのかという問題が重要となるが、これについては、「ドーナル = オニールの要請」という解釈がこの80年近くの間ア일랜드 史研究者の間で定説となっていた。しかし、以下で紹介するように、その論拠となった3つの史料のうち2点が近年になって捏造文書であることが証明され、この定説は再検討を迫られている。

その史料の1つは、ブルースの 아일랜드 侵略を論述したゲール語の文献で、1905年にゲール語学者のH・モリス (Henry Morris) がはじめて紹介したものである。その中に、「アイリッシュが一人のリーダーのもとに結束することが出来ないため、ドーナル = オニールがアルスターの他の王たちの承認を得て4人の使者をスコットランドに派遣し、ロバート1世に

アイルランドの王になるように招いたが、ロバート1世は弟エドワードを指名した」という趣旨の話があり、これがオニール要請説の論拠となった<sup>51)</sup>。もう1つの史料は、オニールがマッカーシ宛に送ったとされる書簡であり、1926年にアイルランド公文書館副館長のH・ウッド(Herbert Wood)によって紹介された<sup>52)</sup>。書簡の中でオニールは、「エドワード = ブルースがアイルランドの王になってイングリッシュをアイルランドから追い出すことを確約した」ことを伝え、「我われの自由を取り戻すにはゲールの結束が必要」と訴えてマッカーシにエドワードへの協力を要請している。

しかし、H・モリスもH・ウッドも史料を紹介しただけで、これらの史料の出所、作成年代そして真正性そのものの究明はそれぞれの専門家に委ねたのであるが、その後、詳しい検証もおこなわれないうちに「ドーナル = オニールの要請」説の論拠とされてきた。特にゲール語文献は、ブルースのアイルランド侵略に関する‘Irish tradition’として、「オニールの要請」に限らず、前節で紹介したエドワード = ブルースの即位の場所などさまざま論拠として使われ続けてきた<sup>53)</sup>。同様に、マッカーシ宛書簡もブルース侵略期におけるアイリッシュ間の交流を示す興味ある例として評価を受けてきた<sup>54)</sup>。ところが、1980年代になってこれらの史料の真正性が本格的に検証された結果、まず、D・オムルハ(D. O Murchadha)がオニールの書簡は1718年にロンドンのTh・オサリバン(Thomas O’Sullivan)によって創作されたものであることを証明した<sup>55)</sup>。ついで、S・ダフィ(Sean Duffy)がゲール語文献全体の内容を他の史料や近世以降の歴史書などと照合して逐一検討した結果、これは1845年にダブリンで編纂された捏造文書であることを論証した<sup>56)</sup>。

「ドーナル = オニールの要請」説の論拠とされる第3の史料は、オニールが教皇宛に送った‘Remonstrance’で、前節で紹介したように、その文末にある「アイルランドの自由を取り戻すためにエドワード = ブルースを招き…」という主張である。‘Remonstrance’の真正性は歴史的に証明されているから、上記2点の史料が捏造文書であることが証明された現在、この一節が「ドーナル = オニールの要請」説の唯一の論拠となっている。しか

し、既に述べたように、この主張自体はオニールが1315年5月のアイランド侵略そのものの首謀者であることを証明するものではない。オニールがエドワード = ブルース上陸後の第1回遠征に参加していたことは‘Remonstrance’以外の同時代史料から確認され<sup>57)</sup>、彼がエドワードの同盟者であったことは事実である。しかし、それ以上のことは語っていない<sup>58)</sup>。

1315年秋にアングロ・アイリッシュ諸侯がエドワード2世に送った報告の中にエドワード = ブルース上陸後のアルスターの様子を伝えたものがある。その1つは、「彼ら（ブルース軍）が到着するとアルスターの中のスコットランドにもっとも近い地方のアイリッシュが進んで受け入れ」と書いている<sup>59)</sup>。オニールの勢力圏はアルスター中部の内陸地方（Tyrone）であるが、この文面からすると、ティロンよりもかなり北東に居住する人びとがブルース軍受け入れの中心であったと推定される。さらに、もう1つの報告には、「彼らは、アイリッシュの一部の同意によって侵略した」とあり、別の報告には、「彼らの到着以来、アルスターとラウスのアイリッシュ、それにイングリッシュの一部、特にビセット（Bisset）とローガン（Logan）が積極的に受け入れ援助している」と書かれている<sup>60)</sup>。これらの報告から、アイランド側がエドワード = ブルースを招いたというより、彼らはエドワードの侵略を事前に承知していた、つまり、働きかけたのはスコットランド側であったと推測されるのである。

ブルース兄弟がアイランドに対して働きかけをおこなっていた事実がいくつか知られている。これについては、別稿で詳しく紹介したが、その概略を述べれば、まず1306年秋から翌年初めにかけてロバート1世が書簡を送っている。その中でロバート1世は、スコットとアイリッシュは「同じnatioから生まれ、言語と慣習を共有している」のであるから、古来からの自由を回復するために互いに同盟すべきであり、そのための使者を派遣したと記し、「アイランドのすべての王」に支援を求めている<sup>61)</sup>。次に、アイランドの年代記から、1313年5月のマン島遠征の際にロバート1世がアルスターを訪れたことが知られている<sup>62)</sup>。ただし、その目的については不明である。また、先に紹介したように、バーバおよびイングランドの年

代記によれば、1315年の侵略直前にエドワード＝ブルースがアイルランドに書簡あるいは使者を送って「アイルランド王」になるための交渉をしたという<sup>63)</sup>。そして、1315年2月には「ロバート＝ブルースのメッセンジャー、ヘンリ」なる者が逮捕され、ダブリン城に投獄されている<sup>64)</sup>。おそらく、アイルランド侵略のための同盟工作を展開していたと推測される。このような事実から、アイルランド侵略のイニシアティブを取ったのはロバート1世とその弟エドワードであり、かなり長期にわたって画策していたといえる。

## 2) 「対イングランド第二戦線」

アイルランド侵略がスコットランド側の主導でおこなわれたとすれば、そのねらいは何か。この問題については、「征服」説と「対イングランド第二戦線」説があることは既に紹介したが、侵略はこの2つに限らず複数の目的をもってたと解釈される。そのもっとも緊要のねらいは、もちろん独立戦争に決着をつけることであった。

独立戦争期に、アイルランドはイングランドの兵站補給基地として活用され、大量の人的物的資源がアイルランドからスコットランド西部に駐屯するイングランド軍に送り込まれていた。たとえば、戦争の勃発した1296年には、アルスター伯らアングロ・アイリッシュ諸侯29名が召集され、合計3,157人の兵士を率いてスコットランドにむけて出航している。これ以後、1300年には約360人、1301年には約2,200人、1303年には53名の諸侯を含め合計で約3,400人がスコットランドに出陣している<sup>65)</sup>。さらに、これらの兵士に兵糧を補給するため、アイルランド東部の港からカーライルに穀物・肉・ワインなどの物資が大量に運び出されていた<sup>66)</sup>。イングランド軍によるスコットランド南西部の占領は、アイルランドからの物資補給に大きく依存していたのであり、カーライルはまさに西部戦線の生命線であった。

このような現状から、ロバート1世は弟エドワードにアイルランドを侵略させ、そこにイングランドとの戦線を新たに開いて補給路を断ち、スコッ

トランドで展開しているイングランド軍の弱体化をはかった。これが「対イングランド第二戦線」説である。この見方は、同時代のイングランドの年代記の中にあらわれている<sup>67)</sup>。また、侵略直後の1315年7月末に第1回遠征途上のブルース軍がアイリッシュ海に面したキャリックファーガス城を攻撃しているが、ほぼ同じ時期にロバート1世がカーライルを攻撃している。その後の一年あまりの間、ブルース軍はキャリックファーガス城の攻囲に多大な力を注いでいる。これは、彼らがこの城の軍事的重要性をいかに認識していたかを示している。したがって、アイランド侵略がイングランドの軍事資源の消耗あるいは枯渇をねらったことは確かであろう。

結果からみても、ブルースの侵略期から1322年まではアイランドからスコットランドに遠征軍は派遣されず、また、物資がカーライルあるいはイングランドの他の拠点に運ばれた形跡もない<sup>68)</sup>。この点でアイランド侵略はその目的を果たしたといえる。しかし、ブルース軍は、キャリックファーガス城の陥落後もロバート1世みずから加わって「アイランドの端から端まで」（バーバ）遠征している。「第二戦線」を開くだけが目的ではなかったことを示している。

### 3) 「アイランド征服」と「アイランド王国」

当時の人びとの目には、ブルース軍はアイランドを「征服」に来たと映っていた<sup>69)</sup>。征服とは、『コナハト年代記』のいうように「アイランドから Gall（外国人）を追い出す」こと、つまり Lordship（イングランド支配）を解体することであり、その上でアイランドをエドワード = ブルースを王とする王国にすることである。これが侵略の目的の1つであったことは確かであり、遠征に投入した相当な軍事資源からみて、おそらく究極の目的であったと推測される。

しかし、疑問がないわけではない。たとえば、遠征のいずれにおいても Lordship の最大の拠点たるダブリンを攻撃していない。第3回遠征では、その近郊にまで接近して市壁の内側にパニックを引き起こしたが、結局は攻囲することもなく通り過ぎている。ダブリンに限らず、4回の遠征の中

でブルース軍が攻囲した城砦都市は第1回遠征でのキャリックファーガスの町だけであり、ドロエダ(Drogheda)やマンスターにむかう途上にあるキルケニイ(Kilkenny)など、アングロ・アイリッシュの支配する城砦都市はいずれも攻撃の対象となっていない。おそらく攻囲には多大な時間と人的・物的資源を要し、しかも時期が真冬であったから、回避する作戦を取ったと見ることも出来る<sup>70)</sup>。しかし、征服を実現するには、避けて通れない問題であろう。

次に、仮に Lordship を解体したとしても、征服の目的を真に実現するには、ゲーリック・アイルランドの一致した同意によってエドワード = ブルースが「アイルランド王」として承認される必要がある。これは、Lordship の解体と同じくらい、あるいは、それ以上に困難なことであった。なぜなら、アイリッシュが1つにまとまることはゲーリック・アイルランドにとってまったく経験したことの無いことであり、ブルースの侵略以前に一人の王がアイルランド全土を実効支配した例はないからである<sup>71)</sup>。こうしたアイルランドの現状をロバート1世あるいはエドワード = ブルースが実際に認識していたのかという疑問である。ロバート1世は、先に紹介したアイルランド宛書簡(1306-7)の中でも、「アイルランドのすべての王」の支持を求めているから、「ゲール」の同胞意識に訴えて反英闘争を煽るとともにスコットランドの軍事力を投入すれば、ゲーリック・アイルランドの結束をはかることが出来ると考えたのかもしれない。しかし、アイルランドの現実は厳しいものであった。

ブルース軍は、この節の1)で紹介したように、アルスターではアイリッシュの支持を確保できたようである。これは、ロバート1世側の事前の働きかけによってその土台がある程度用意されていたためと推測される。しかし、そのアルスターでさえ、ブルース軍の南への進軍を妨害した反オニール派がいて、アイリッシュの結束は決して一枚岩ではなかった<sup>72)</sup>。さらに、ひとたびアルスターを出ると、ブルース軍がアイリッシュから積極的な支持や援助を得ることはほとんどなかった。この結果、特に第2回、第3回遠征は飢饉のあとの冬におこなわれたから、進軍する先々で支持者を確保

できなければブルース軍は物資の欠乏により重大な困難に陥らざるをえず、さらに掠奪と焼き討ちを重ねることになる。こうした無差別の破壊行動は侵略当初に支持あるいは好意を示していた勢力を遠ざけてしまう危険をはらんでいた。『コナハト年代記』は、1318年のエドワード = ブルースの戦死について、「アイランドの Gall だけでなく Gaels にとっても災いのもとであったエドワード = ブルースがダンドークで殺された。世界の始まり以来の快挙であり、これほど喜ばしいことはない。なぜなら3年半におよんだ侵略の間、欺瞞と飢饉、殺人が国中に蔓延し、人びとがお互いに食い合っていたから」と論評し、飢饉の責任までエドワードに負わせている<sup>73)</sup>。

しかし、ブルース軍の遠征がゲーリック・アイランドに対して何ら影響を与えなかったというわけではない。遠征に呼応してアイリッシュがそれぞれの地域で蜂起したこと、または何らかの反応を示したことは事実である。たとえば、第1回遠征の影響は遠くマンスター南西部にまで波及し、デズモンド (Desmond) では「アイリッシュがスコットの侵入に鼓舞されて反乱を起こし、所領のすべてを失う恐れがあった」と、アングロ・アイリッシュ諸侯のひとり (Maurice fitz Thomas) が報告している<sup>74)</sup>。第3回遠征でも、「スコットの到来でレンスター山地のアイリッシュが公然と蜂起し」、オーバン族 (O'Byrnes) やオトゥール族 (O'Tooles) が近隣の町や村を焼き払ったという<sup>75)</sup>。しかし、これらの地方・地域は、それぞれ固有の問題をかかえ、以前から同様の蜂起や混乱が発生していた<sup>76)</sup>。今回はブルース軍の進軍に乗じてそれぞれの目的を達成しようとしただけであり、征服の目的そのものに呼応したわけではなかった。もちろん、こうした各地のアイリッシュの個別的な動きを結合して一貫した運動へと組織すれば、征服の目的を達成することは可能であろうが、エドワード = ブルースあるいはロバート1世にはその手立てがなかったということであろう。より根本的には、「全アイランドの結集」なるものを期待したこと自体がブルース兄弟の現状認識の限界を示しているともいえる。

アイリッシュの中には、ブルース軍の軍事力を使って自己のライバルを

打倒しようとする者まで現れた。第3回遠征におけるソモンドのドナフ = オブライエンがその代表例であり、ドナフにとってブルース軍はアイルランド解放軍であるよりも先に自分のライバルを引き摺り下ろすための手段であった。これより先、第1回遠征におけるコナーの戦いの際にも、エドワード = ブルースはコナハトのオコナー族 (O'Connors) の内部対立に巻き込まれ、欺かれている。この例は、対立するライバル2人にとって、ブルース軍に荷担してアルスター伯と戦うことよりも、コナーから兵を引き上げて一刻も早くコナハトに戻り、ライバル不在の間に自己の勢力の拡大をはかることのほうが重要であったことを示している<sup>77)</sup>。

最後にアイルランド侵略に対するアングロ・アイリッシュの対応にふれておく。侵略以前に彼らが一枚岩の団結を誇っていたわけではないし、また第2回遠征の戦場で「諸侯の間の対立」という「不運な出来事」の生じたことはあったが、ブルース軍の進軍に対しては総督のもとに結集して Lordship の防衛にあたっている。たとえば、ラウスはブルース軍による3回の遠征の通り道になったところであるが、ラウス防衛の立役者となったのは、いずれも1312年にこの地方で起きたダブリン政府に対する大規模な反乱の首謀者らであった<sup>78)</sup>。彼らにとってブルース軍との戦いは、自己の所領を守る防衛戦争であるとともに、ダブリン政府あるいはエドワード2世に対する忠誠を証明する機会でもあった。とりわけ、反乱の中心人物であったヴァードゥン家のニコラスは、弟マイルズ (Nicholas & Miles de Verdon) とともに1315年秋にエドワード2世へ報告書を送ってブルース軍との戦いの功績をアピールする一方<sup>79)</sup>、実際にもダンドークの防衛やブルース軍のラウスからの追放に活躍し、さらに1317年にロジャ = モティマがミーズでラーシー族を追放した際にはジョン = ド = バーミンガムとともにこれに力を貸している。1318年のフォートの戦いでド = バーミンガムの率いた軍の中核をなしたのも1312年のラウス反乱の首謀者らであり、彼らが後にエドワード2世から破格の恩賞を与えられたことは既に述べたとおりである<sup>80)</sup>。

アングロ・アイリッシュの中にブルース軍に荷担したものがいたことは

事実である。しかし、その背景をみれば、彼らも、アイリッシュの場合と同様に、個人的あるいは個別的な目的を達成するためにブルース軍を利用したということが出来る。その代表例がビセット家とラーシ家であった。ビセット家はスコットランドの出身で、1240年代に貴族間の政争に敗れてウォルタとジョンの兄弟がアルスターに亡命し、アイランドにおけるこの家の歴史が始まった。その子孫のジョン = ビセットがエドワード = ブルースに同行してアルスターに上陸し、また、上陸後にビセット家がブルース軍を援助していたことは既に紹介したとおりである。しかし、年代記の1つは、1316年11月にジョンの父ヒューがアルスターでブルース軍の兵士多数を殺害したことを伝えており<sup>81)</sup>、ビセット家の忠誠心は必ずしも一貫していない。みずからは反ブルースの立場を示しながら他方で息子にブルース軍を支持させて、危険を分散する策を取ったとも推測される<sup>82)</sup>。しかし、ビセット一族の行動の背景にあるのは、アルスターの所領をめぐるマンデヴィル家との長年にわたる対立およびスコットランド西部の島嶼地帯をめぐるマクドゥゴール家との対立であった。前者は代々アルスター伯の代官をつとめ、後者はロバート1世の宿敵であるコミン派の残党のひとりで、前節で述べたように、アイランド侵略前後にはジョン = マクドゥゴールがダブリン政府の支援を受けてアイリッシュ海で対スコットランド牽制作戦を展開していた。これら対立者のその時々々の動向がアイランド侵略に対するヒュー = ビセットの立場を規定したといえる<sup>83)</sup>。

ミーズのラーシ家は、ブルース軍に積極的に身を投じたアングロ・アイリッシュ諸侯の数少ない例の1つで、前節で紹介したように、少なくとも第2回遠征以後ブルース軍と行動をとともにし、フォートでは4人の兄弟がエドワード = ブルースの陣営で戦ったことが確認される<sup>84)</sup>。彼らは、アルスター伯ヒュー = ド = ラーシ (Hugh de Lacy) の傍系の子孫で、ヒューが1172年にミーズに創設した大所領の大半がその後、女子相続人をとおしてヴァードゥン家 (13世紀後半) とロジャ = モティマ (1307年) に渡り、ラーシ家にはわずかな土地しか残されていなかった<sup>85)</sup>。これがブルース軍に身を投じた理由であり、彼らはその軍事力を利用してこれらの土地を回

復しようとしたのである。それは、第2回遠征においてラーシ家の兄弟2人がブルース軍を道案内し、ヴァードゥン家とモティマの所領を特に攻撃していること、モティマがヴァードゥン一族の力を借りてラーシ兄弟の告発とミーズからの追放に精力的に取り組んでいることなどからも証明される。ラーシ一族にとってエドワード = ブルースの侵略は宿敵を打倒するまたとない機会であったといえる<sup>86)</sup>。

#### 4) “ケルト同盟”

エドワード = ブルースの 아일랜드 遠征の中で、第2回・第3回の遠征がいずれも真冬に、しかも飢饉のあとの真冬におこなわれたことについて、R・フレイムは「思慮ある指揮官なら絶対に選ばない時期」と述べ、その戦略に疑問を投げかけている<sup>87)</sup>。確かに、軍事行動にとっては最悪の時期であるが、ウェールズにおける動きを視野に入れば、悪条件を承知で遠征を急いだと推測できる。なぜなら、アイルランドでの軍事行動にほぼ対応してウェールズで反英闘争が起きているからである。まず、『エドワード2世伝』は、1315年5月末のアイルランド侵略直後にイングランドでは、「スコットがアイルランドで成功したら、ただちにウェールズに渡り、ウェールズの人びとを蜂起させる」という噂が広まっていたことを伝えている<sup>88)</sup>。しかし、噂だけでなく実際にも、既に第1回遠征の時から、アイルランドにおける軍事行動がウェールズにおける動きと連携していたことを示す事実がある。

第1回遠征におけるコナーの戦い(1315年9月)とほぼ同じ頃、トマス = ダンが北ウェールズのアングルシーにあるホリーヘッド港(Holyhead)を襲っているが、注目されるのはこの地方の役人が「スコットと結託している」という報告であり<sup>89)</sup>、反英闘争を煽る活動がおこなわれていたと推測できる。次に第2回遠征でブルース軍がレンスターへと進軍した1316年1月から2月に、ウェールズのグラモーガン(Glamorgan)ではイングランドの支配に対する不満からルエリン = ブレン(Llywelyn Bren)が反乱を起こしている<sup>90)</sup>。さらに、第3回遠征に先立って、1316年秋から12月に、ア

イルランドのエドワード = ブルースとウェールズの有力者との間で反英闘争に関する書簡が交わされている。まず、エドワードがウェールズの「隷属からの解放を望むすべての人びと」に対してブルースの軍事力でウェールズを解放するから自分を「ウェールズ公」にするよう提案している<sup>91)</sup>。これに対する北ウェールズの有力者グリフィズ = ロイド (Gruffydd Llwyd) の書いた返信が残されている。実際に送られたものか、その写しかどうかは不明であるが、この中でロイドは婉曲な表現で「ウェールズ公」として迎えることは拒否しながら軍事援助を受け入れる意向を示している<sup>92)</sup>。ロイドが12月に逮捕されてウェールズで反乱が起きることはなかったが、ロバート1世らが12月末にアルスターに上陸して真冬の時期に第3回遠征をおこなった背景には、ウェールズの反英闘争との連携が考えられていたと推測される。この推測が成り立てば、スコットランド側は、アイランドだけでなくウェールズをもエドワード = ブルースの支配下においてロバート1世を宗主とする“ブルース帝国”なるものを構想していたことになる。

## むすびにかえて

以上のように、同時代史料に基づいて当時の状況の中で検討すれば、アイランド侵略にはきわめて多様な背景があり、アイランドとスコットランド双方のさまざまな目的、思惑がからまりあっていたことがあきらかであろう。このことがアイランド侵略をわかりづらいものにし、後世の歴史家に「奇妙な戦争」(C・マクナミィ)と評される所以といえる。しかし、アイランド侵略にはもう1つの背景が考えられる。それは、いわばブルース王家の内部事情ともいふべき問題であり、いまだ仮説の域を出ないが、これを紹介してむすびにかえたい。

アイランド侵略のひと月前、1315年4月27日にスコットランド西部のエア(Ayr)に聖俗の諸侯が集まり、ロバート1世の相続人についてはじめての規定を承認した<sup>93)</sup>。ちなみに、ロバート1世は1302年にアルスター

伯の娘エリザベスと再婚したが、エリザベスが8年間捕虜としてイングランドに幽閉されていたこともあって2人の間に子供はなく、先妻との間に生まれたマージョリ (Marjory Bruce) が国王の唯一の子供であった。このため、国王の後継者問題は長年の懸案とされてきたが、1315年1月にエリザベスが帰国し、ロバート1世に男子誕生の可能性が生まれた。これが王位の継承についてはじめて規定が制定された背景である<sup>94)</sup>。そこで定められた規定は3つの項目からなるが、その2つは、「ロバート1世と国王の娘で現時点までの確定相続人であるマージョリとの同意によって」<sup>95)</sup>、ロバート1世に男子がいない場合はエドワード = ブルースを相続人とする事、ロバート1世とエドワード = ブルースのいずれにも男子相続人がいない場合はマージョリが王位を継承すること、ただし、マージョリの結婚については国王の承認を必要とすること、という内容である。つまり、ロバート1世の生まれてくるであろう男子が王位を継承するのが大前提で、男子が生まれないうちは、国王の娘ではなく、国王の弟が優先的継承権をもつことになったのである。女子の王位継承に対して予防策が講じられたのは、もちろんアレグザンダー3世死後の経験からであろう。しかし、その第三の項目には、「ロバート1世が死亡したとき、その男子相続人が未成年の場合には、マリ伯トマス = ランダルフをその男子相続人の後見人とし、王国の摂政とする」とあり、王弟エドワードに対しても予防策が講じられたことを示している。なぜなら、この後見人には叔父にあたるエドワードになるのが通常だからである。したがって、この規定は、エドワードの恒常的不在を前提にしている、つまり「アイルランド王」になっていることを前提にしていると解釈できる<sup>96)</sup>。

この関連で想起されるのが、バーバの伝える有名な話である。その内容は、エドワード = ブルースが、「兄と自分の2人にとって、スコットランドはあまりにも小さいので、アイルランドの王になろうと使者を送ってアイリッシュと交渉」した結果、アングロ・アイリッシュを打倒してくれればアイルランド王にすると約束したので、兄の承認のもとで一路アイルランドに向かったというものである<sup>97)</sup>。バーバの著作は、ロバート = ブルー

スを過大に英雄視し、特に失敗に終わったアイランド侵略については、その責任をひとりエドワードに負わせる傾向があることは既に述べた。したがって、バーバを利用する際には同時代史料で裏付ける必要があるが、上記の王位継承規定の内容と照らし合わせると、この一節は事実のある断面を伝えていると推測されるのである。

ロバート = ブルース（ロバート 1 世）といえは、バーバの時代から現在にいたるまでスコットランド王国を滅亡の淵から救った英雄として、いわばスコットランド・ナショナリズムの象徴として描かれてきた。それは、確かにロバート = ブルースの一面を伝えてはいるが、独立戦争当時の状況の中で検討すれば、彼のすべてではないことがあきらかになる。なぜなら、独立戦争において、スコットランド王国独立の「大義」を担ったのは、まずジョン = ベイリオール（John Balliol, 在位 1292-1306）およびその姻戚関係にあるジョン = コミン（John Comyn）を中心とした勢力であり、ロバート = ブルースはエドワード 1 世の陣営に加わったこともあって、その行動に一貫性があるとは必ずしもいえないからである。

ブルース家は、ロバート = ブルースの祖父（Robert Bruce the Competitor）以来、スコットランド王位の継承に命運をかけ、ベイリオールを宿敵としてきた。ロバート = ブルースの行動の背景にあるのもベイリオール・コミン派への対抗であり、それはブルース家の宿願達成という使命を担ったのであった。1306 年にロバート = ブルースがスコットランド王に即位してブルース家の宿願を達成した。しかし、それは宿敵ジョン = コミンの殺害とジョン = ベイリオールの事実上の廃位とによってはじめて達成されたのであり、これ以後、ベイリオール・コミン派はイングランド王権と同盟してロバート 1 世に敵対し続けた<sup>98)</sup>。ロバート 1 世が王国独立の「大義」を担う「救国の英雄」としての道を歩み始めるのは、こうした反ブルース派との戦いの中からである。しかし、それは容易なことではなく、バノクバーンの勝利によってはじめてロバート 1 世が国王として王国内で広く認知されるようになったといえる。それでも、イングランド王権は彼を国王とは認めず、教皇も教会内でのジョン = コミン殺害に対して下した

破門を解かなかつた。また、ベィリオール・コミン派も根絶されたわけではなく、その残党のひとりジョン＝マクドゥゴールがアイルランド侵略前後にイングランド王権の庇護下で反ブルース活動を展開していた。さらに、1318年12月の議会では、エドワード＝ブルースの戦死をうけてあらたな王位継承規定が制定され、ロバート1世に男子がない場合はマージョリの息子ロバート＝ステュアート(Robert Stewart)がその王位を継承することが定められたが、この規定の冒頭には、聖俗諸侯が国王と(生まれるであろう)その男子相続人に対して一身専属の臣従を誓うこと、および、この規定に背く者は反逆者となることが記されている<sup>99)</sup>。これは、一種の威嚇条項であろうが、国内における不穏な動きの反映とも受け取れる。事実、1320年6月にベィリオール・コミン派の陰謀が発覚し、少なくとも4人の諸侯が処刑あるいは投獄されている<sup>100)</sup>。この事件は、聖俗諸侯50名が連名でロバート1世が正統なる国王であることを訴えて所謂「アーブロウスの宣言」を教皇に送って2か月後のことであった。

以上のようなロバート1世のおかれていた状況を考えれば、アイルランド侵略の背景には、ロバート1世に男子誕生の可能性が出てきたことによって、王位継承から遠のいたエドワード＝ブルースを「アイルランド王」にすることで、ブルース王朝の安定をはかるという意図もあったのではないか。1315年4月の王位継承規定の第三項をエドワード＝ブルースに対する予防策とよんだのは、彼をアイルランドにおくことで継承争いを未然に防ごうとしたという意味である。しかし、いずれも状況証拠にすぎず、1つの仮説であることは、先に述べたとおりである。

**追記** 本稿は平成14年度北海学園学術研究助成「共同研究 欧米文化の諸相：異文化理論と日本の課題」による研究成果の一部である。

#### 註

- 1) 本稿で参照したアイルランド史家による研究は次のとおりである。G.H.

- Orpen, *Ireland under the Normans 1169-1333*, vol. 4, Oxford, 1968 (rep.), Ch. 37 ('The Invasion of Edward Bruce'); J. Othway-Ruthven, *A History of Medieval Ireland*, London, 1980 (rep.), Ch. 7 ('The Bruce Invasion and Its Aftermath'); J. Lydon, 'The Bruce Invasion of Ireland', *Historical Studies*, 4 (1963), pp. 111-25; Do., 'Edward II and the Revenues of Ireland in 1311-12', *Irish Historical Studies* [IHS] 14 (1964), pp. 39-57; Do., 'Edward I, Ireland and the War in Scotland', in Do (ed.), *England and Ireland in the Later Middle Ages*, Dublin, 1981, pp. 43-59; Do., 'Impact of the Bruce Invasion, 1317-27', in A. Cosgrove (ed.), *A New History of Ireland*, II, Oxford, 1987, pp. 276-302; R. Frame, 'The Bruces in Ireland, 1315-18', *Ireland and Britain 1170-1450*, London, 1998, pp. 71-98 (IHS, 19 (1974) に発表した同名の論文を訂正・加筆したもの) ; Do., 'The Campaign against the Scots in Munster', *IHS*, 26 (1985), pp. 361-72 (*Ireland and Britain*, pp. 99-112) ; T.E. McNeill, *Anglo-Norman Ulster: The History and Archaeology of an Irish Barony, 1177-1400*, Edinburgh, 1980; J.R.S. Phillips, 'The Remonstrance of 1317: an International Perspective', *IHS*, 18 (1990), pp. 112-129; Do., 'The Remonstrance Revisited: England and Ireland in the Early Fourteenth Century', in T.B. Fraser & K. Jeffery (eds.), *Men, Women and War*, Dublin, 1993, pp. 13-27; S. Duffy, 'The Bruce Brothers and the Irish Sea World', *Cambridge Medieval Celtic Studies*, 21 (1991), pp. 55-86; S. Duffy, 'The Bruce Invasion of Ireland: a Revised Itinerary and Chronology', in Do (ed.), *Robert the Bruce's Irish Wars: Invasions of Ireland 1306-1329*, Stroud, 2002, pp. 9-43; B. Smith, 'The Bruce Invasion and County Louth, 1315-1318', *County Louth Archaeological and Historical Journal*, no. 21 (1989), pp. 7-15; Do., *Colonisation and Conquest in Medieval Ireland: The English in Louth, 1170-1330*, Cambridge, 1999, pp. 93-121.
- 2) G.H. Orpen, *op. cit.*, p. 160.
- 3) A.A.M. Duncan, 'The Scots' Invasion of Ireland, 1315', in R.R. Davies (ed.), *The British Isles 1100-1500: Comparisons, Contrasts and Connections*, Edinburgh, 1988, pp. 100-17; C. McNamee, *The Wars of the Bruces: Scotland, England and Ireland, 1306-1328*, East Lothian, 1997, Ch.5 ('The Bruce Intervention in Ireland, 1315-22'), pp. 166-205.
- 4) G.W.S. Barrow, *Robert Bruce and the Community of the Realm of*

- Scotland*, Edinburgh, 1988 (3rd. ed.), p. 317.
- 5) A.A.M. Duncan (ed.), *John Barbour, The Brus*, Edinburgh, 1997, pp. 667-71.
- 6) 拙稿,「スコットランド独立戦争とアイルランドーその1 ブルースの侵略とプロパガンダ文書をめぐって」,『エール』第19号,1999年12月,23頁-41頁。本稿は「アイルランド研究年次大会」(2002年12月,大阪)での報告を骨子としている。
- 7) J.T. Gilbert (ed.), *Chartularies of the St. Mary's Abbey* [CSM], vol. ii, London, 1884; A.M. Freeman (ed.), *Annals of Connacht (A.D. 1224-1544)* [AC], Dublin, 1998 (rep. of 1944); S. Mac Airt (ed.), *Annals of Innisfallen*, Dublin, 1988 (rep. of 1951)。フランシスコ会修道士クリンもブルース軍の動きについて記録を残している。R. Butler (ed.), *Annals of Ireland by Friar John Clyn and Th. Dowling* [Clyn], Dublin, 1849.
- 8) J.R.S. Phillips, 'Documents on the Early Stages of the Bruce Invasion of Ireland', no. 8-18 (pp. 257-265).
- 9) *Ibid.*, 'Documents', nos. 4 (pp. 251-52), 7 (pp. 255-26)。ホサムの経歴とアイルランドにおける権限については, J.R.S. Phillips, 'The Mission of John de Hothum to Ireland, 1315-1316', in J.F. Lydon (ed.), *England and Ireland in the Later Middle Ages*, Dublin, 1981, pp. 62-85 および *Cal. Pat. Rolls*, 1313-17, p. 347 参照。
- 10) R. Frame, 'The Campaign against the Scots in Munster', pp. 361-72 (*Ireland and Britain*, pp. 99-112).
- 11) A.A.M. Duncan (ed.), *John Barbour*, p. 521; AC, p. 230.
- 12) CSM ii, p. 350.
- 13) CSM ii, p. 344; AC, p. 230.
- 14) *Clyn*, p. 12.
- 15) AC, p. 233.
- 16) アルスター伯の軍だけでブルース軍を追うことになったのは, AI によれば,「アルスターが王軍によって荒らされるのをアルスタ伯がおそれたためであった」。AI, p. 231。ちなみに,アルスタ伯が総督軍の追跡を断ったこと,またコナーの戦いで簡単に敗北したことは,伯がエドワード = ブルースと結託しているとの疑惑を生み,1317年2月22日に伯がダブリンで逮捕・投獄される一因となった。CSM, ii, pp. 299, 352.
- 17) AI, p. 419; AC, p. 233。いずれも1315年の項。

- 18) *CSM* ii, pp. 347-48. 陪審裁判でラーシ兄弟は、ブルース軍を案内したのは故意に遠回りしてイングリッシュの土地が荒らされないようにしたためであると抗弁し、陪審もこの主張を認める評決を出している。*Ibid.*, pp. 407-9.
- 19) J.R.S. Phillips, 'Documents', no. 4 (p. 251); B. Smith, 'The Bruce Invasion and County Louth, 1315-18', p. 13.
- 20) *SCM*, ii p. 347. その後ホサムは諸侯らをダブリンに集めてアイランド防衛を誓約させ、その実行のために人質を取るなど強い拘束力を発揮している。また、ブルース軍の侵入によって既に破綻に瀕していたダブリン政府の財政は一層困難な状況におかれていたが、この窮状をホサムは、「自分に残された資源といえば信念と言葉だけである」と表現して、本国へ資金援助を訴えている。J.R.S. Phillips, 'Documents', no. 4 (pp. 251-52).
- 21) *Clyn*, p. 12.
- 22) *SCM*, ii, p. 296; G.O. Sayles, 'The Siege of Carrickfergus Castle, 1315-16', *IHS*, 10 (1956-57), pp. 94-100.
- 23) G.H. Orpen, *Ireland under the Normans*, vol. 4, p. 179; J. Othway-Ruthven, *A History of Medieval Ireland*, p. 230; G.W.S. Barrow, *Robert Bruce*, p. 316.
- 24) *AC*, p. 231; *SCM*, ii p. 345. A・ダンカンは、「聖フィリップと聖ヤコブの祭日」は「St. Philips the Deacon の祭日」（6月1日）の間違いとみなし、1315年6月説をとり、S・ダフィもこの解釈を支持している。A.A.M. Duncan, 'The Scots' Invasion of Ireland', pp. 107-8; S. Duffy, 'The Bruce Invasion of Ireland', p. 13.
- 25) フォートに代わってS・ダフィはキャリックファーガスを、C・マクナミィはアーマーをそれぞれ即位の場所と推定している。S. Duffy, 'The Bruce Invasion of Ireland'; p. 13; C. McNamee, *The Wars of the Bruces*, p. 197.
- 26) A.A.M. Duncan (ed), *Regesta Regum Scottorum* [*RRS*], Vol. V, *Acts of Robert I*, Edinburgh, 1988, no. 101 (p. 378). この他の3点の史料のうち1つは、1316年末にエドワード = ブルースがウェールズに宛てた書簡である。*RRS*, V, no. 571 (p. 700). 第二は、アーマー大司教 Fleming の権利証書で、その日付は 'anno regni regis Edwardi primo' と「アイランド王エドワード」の治世年で示され、保証人として 'Dominum Edwardum Dei gratia regem Hiberniae' と記されている。H.J. Lawlor, 'Cal. Reg. Archbishop Fleming', *Proceeding of Royal Irish Academy* [*PRIA*], Vol. 30 (1912-13), pp. 142-43. もう1つは、エドワード = ブルースが戦死した後の1323年の勅

- 許状で、この中でロバート1世は、「アイルランド王エドワード」が John de Carleton なる者におこなった土地の譲渡を追認している。RRS, V, no. 235 (p. 571)。
- 27) マリ伯は1317年10月にマン島を奪回し、「マン領主」となっている。RRS, V, p. 379.
- 28) S. Duffy, 'The Continuation's of Nicholas Trevet: A New Source for the Bruce Invasion', *PRIA*, vol. 91 (1991), p. 314; 前掲拙稿, 31頁。
- 29) S. Duffy, 'The First Ulster Plantation: John de Courcy and the Men of Cumbria', in T. B. Barry et al. (eds.), *Colony and Frontier in Medieval Ireland*, London, 1995, p. 24-25.
- 30) S. Duffy, 'The Bruce Brothers and Irish Sea World', pp. 62-63; A.C. McDonald, *Kingdom of the Isles: Scotland's Western Seaboard c. 1100-c. 1336*, East Linton, 1997, pp. 198-99.
- 31) S. Duffy, 'The Bruce Invasion of Ireland', pp. 30-31.
- 32) *CSM*, ii, p. 298.
- 33) *Ibid.*, p. 352. ロバート1世がアイルランドに上陸したとき、イングランドの年代記によれば、3万の兵を伴っていたという。H. Rathwell (ed.), *The Chronicle of Walter of Guisborough*, (Camden 3rd Series), 1957, p. 397. 一方、ACはこの兵士を'galloglass'つまりスコットランド西部の島嶼地帯出身の傭兵としている。AC, p. 248.
- 34) マナーを焼き払われたアルスタ伯とその家族はダブリンのシトー会修道院に逃げ込んだが、パニック状態の中で伯はブルースと結託してダブリンを売り渡そうとしているとの嫌疑から逮捕されてダブリン城に投獄された。註17参照。
- 35) *CSM*, ii, p. 352.
- 36) *Ibid.*, pp. 300-1.
- 37) *Caithréim Thoirdhealbháigh*, vol. II, p. 83 (by R. Frame, 'Bruces in Ireland', p. 87).
- 38) R. Frame, 'The Campaign against the Scots in Munster', p. 364 (*Ireland and Britain*, p. 103).
- 39) *AI*, pp. 425-27; G.H. Orpen, *Ireland under the Normans*, vol. 4, pp. 80-88.
- 40) *C.P.R.*, 1313-17, p. 551.
- 41) *C.C.R.*, 1313-18, pp. 450-51.

- 42) CSM ii, pp. 354-55; *Clyn*, p. 13.
- 43) CSM ii, pp. 357-58.
- 44) 教皇に提出された 'Remonstrance' そのものは伝えられていない。現存するのは、スコットランドの年代記に収録されている文書だけであるが、他の史料との照合から、この文書の真正性は証明されている。D.E.R. Watt et als (eds.), *Walter Bower, Scotichronicon*, vol. 6, Aberdeen, 1991, pp. 384-98. この文書全体の検討は、紙幅の制約から別の機会に行う予定である。
- 45) CSM, ii, pp. 355-56, 360; *Clyn*, p. 16.
- 46) B. Smith, 'The Bruce Invasion', p. 15; Do., *Colonisation and Conquest in Medieval Ireland*, pp. 113-14.
- 47) *Ibid.*, ii, cxxviii, n. 2.
- 48) *Calendar of Papal Letters, 1305-42*, p. 422.
- 49) たとえば N. Denholm-Young (ed.), *Vita Edwardi Secundi*, London, 1957, p. 90.
- 50) C. McNamee, *The Wars of the Bruces*, p. 166.
- 51) H. Morris, 'An Irish Account of Bruce's Invasion', *Journal of County Louth Archaeological Society*, 1 (1905), pp. 77-91 (at pp. 78-81).
- 52) H. Wood, 'Letter from Domnal O'Neill to Fineen MacCarthy, 1317', *PRIA*, 37 (1926), pp. 141-48.
- 53) G.H. Orpen, *Ireland under the Normans 1169-1333*, vol. 4, pp. 202, 204; J. Othway-Ruthven, *A History of Medieval Ireland*, pp. 226, 230, 236, n. 41; J. Lydon, 'The Bruce Invasion of Ireland', p. 113; J. Lydon, 'Impact of the Bruce Invasion', p. 286; R. Frame, 'The Bruces in Ireland', *IHS*, 19 (1974), p. 4, n. 6.
- 54) J. Othway-Ruthven, *A History of Medieval Ireland*, p. 236; J. Lydon, 'Impact of the Bruce Invasion', p. 284; R. Frame, 'The Bruces in Ireland', *IHS*, 19 (1974), pp. 11-12, 24-25.
- 55) D. Ó Murchadha, 'Is the O' Neill—MacCarthy Letter of 1317 a Forgery?', *IHS*, 23 (1982-83), pp. 61-67.
- 56) S. Duffy, 'The Gaelic Account of Bruce Invasion *Cath Fhochairte Brighite*: Medieval Romance or Modern Forgery?', *Seanchas Ardmhacha*, 13 (1988-89), pp. 59-121. ダフィは、ニコラス = カーニィ (Nicholas Kearney) をその作者と推定している。オムルハおよびダフィの論証はアイランド史家に受け入れられ、R・フレイムは、*IHS* に掲載した 'The Bruces in

- Ireland, 1315-18', を論文集に収録するにあたってこの2点の史料に依拠した部分を全面的に削除した。註1) 参照。
- 57) *AC*, p. 233; J.R.S. Phillips, 'Documents', no. 17 (p. 263). 前節の1) 参照。
- 58) J・フィリップスが紹介したイングランドの年代記の中に, 「エドワード = ブルースは, 若い頃に一緒に教育を受けたアイルランドの諸侯に要請され, アイルランド王になりたいと切望した」という一節がある。これもアイルランド側の要請でブルース軍が侵略したという意味に解釈できる。しかし, イングランドの年代記作者がドナル = オニールのようなゲーリック・アイリッシュを「アイルランドの諸侯」(magnate Hibernie) と呼ぶ例はないから, 仮にアイルランドからの要請があったとしたら, ドナル = オニールではなくむしろアングロ・アイリッシュからと推測される。J.R.S. Phillips, 'Documents', pp. 269-70.
- 59) *Ibid.*, no. 10 (p. 259).
- 60) *Ibid.*, nos. 14 (p. 261), 8 (p. 257).
- 61) *RRS*, V, no. 564 (p. 564); 前掲拙稿, 24-28頁。
- 62) *AC*, p. 228; *CSM*, ii, p. 342.
- 63) 註28参照。
- 64) J.T. Gilbert (ed.), *Historic & Municipal Documents, Ireland, from Archives of the City of Dublin, 1172-1320*, London, 1870, p. 388.
- 65) J.F. Lydon, 'Edward I, Ireland and the War in Scotland' p. 57; Do., 'The Year of Crisis, 1254-1315', in A. Cosgrove (ed.), *A New History of Ireland II: Medieval Ireland 1169-1534*, pp. 200-1.
- 66) C. McNamee, *The Wars of the Bruces*, pp. 127 (charts 5-6), 203, n. 129.
- 67) H.T. Riley (ed.), *Johannis de Trokelowe et Henrici Blanforde Chronica et Annales*, London, 1866, p. 91.
- 68) C. McNamee, *op. cit.*, pp. 189-190.
- 69) J.R.S. Phillips, 'Documents', nos. 15-16 (pp. 262-63); *AC*, p. 248; N. Denholm-Young (ed.), *Vita Edwardi Secundi*, p. 61.
- 70) R. Frame, 'The Bruces in Ireland', p. 79; J. Lydon, 'Impact of the Bruce Invasion', p. 292.
- 71) R. Frame, *The Political Development of the British Isles, 1100-1400*, Oxford, 1990, p. 141.
- 72) バーバは2人の族長の名前をあげているが, これについてオーパンとフレイムは 'MacCartan of Iveagh' と 'MacDuilechain of Clanbrassil' と同定し

- ている。一方、後者についてダンカンが‘MacQuillan’の可能性を指摘している。G.H. Orpen, *Ireland under the Normans*, vol. 4, p. 163; R. Frame, ‘The Bruces in Ireland’ p. 82, n. 62; A.A.M. Duncan (ed), *John Barbour*, pp. 524-25, n. 100.
- 73) AC, p. 253.
- 74) J.R.S. Phillips, ‘Documents’, no. 14 (p. 261).
- 75) J.T. Gilbert (ed.), *Historic & Municipal Documents*, p. 457; CSM, ii, pp. 348-49; *Clyn*, p. 12.
- 76) G.H. Orpen, *Ireland under the Normans*, vol. 4, pp. 122-25.
- 77) AC, p. 232.
- 78) B. Smith, *Colonisation and Conquest in Medieval Ireland*, pp. 97-100.
- 79) J.R.S. Phillips, ‘Documents’, nos. 15, 16 (pp. 262-263).
- 80) ヴァードゥン家のマイルズは、自身は1312年の反乱には参加していないが、ジョン = ド = バーミンガムとともに1318年にエドワード = ブルースを戦死させ、フォートの英雄として語り継がれることになる。また、恩賞としてエドワード2世からミーズの土地およびドロエダの関税収入の一部を与えられた。*Clyn*, p. 16; B. Smith, *Colonisation and Conquest in Medieval Ireland*, p. 112.
- 81) CSM, ii, pp. 298, 348.
- 82) アイリッシュの族長の中に一族をブルース支持派と反ブルース派にわけ、それぞれを支持させた例が知られている。B. Smith, ‘The Bruce Invasion’, p. 10.
- 83) T.E. McNeill, *Anglo-Norman Ulster*, p. 80; G.W.S. Barrow, *Robert Bruce*, pp. 168-69. 註30)も参照。なお、ヒュー = ビセットはフォートの戦い後にエドワード2世に恩赦を求めたが、その行動はあまりにも悪質として認められなかった。*C.P.R.*, 1317-1321, pp. 271, 313.
- 84) S. Duffy, ‘The Continuation’s of Nicholas Trevet’, p. 315. 4人のうち2人はスコットランドに逃亡し、その一人ヒューは10年あまり後に恩赦を得てアイランドに戻った。*C.C.R.*, 1318-23, p. 91.
- 85) J. Othway-Ruthven, ‘The Partition of the de Verdon Lands in Ireland in 1332’, *PRIA*, vol. 66 (1968), pp. 409-10.
- 86) 最近、S・ダフィは、シトー会修道院（ダブリン）の年代記に基づいて、ラーシ兄弟をミーズから追放した後、モティマが彼らの土地財産をヴァードゥン家とジョン = ド = バーミンガムに分け与えたという事実を指摘し、

- エドワード = ブルースの第4回遠征は、モティマがイングランドに帰国したのを見計らってラーシ兄弟がミーズの土地を回復するのを、あるいはラーシ家の土地を手に入れた人びとに復讐するのを、目的としていたと推測している。S. Duffy, 'The Bruce Invasion of Ireland', pp. 39-43.
- 87) R. Frame, 'The Bruces in Ireland' p. 78, n. 35.
- 88) N. Denholm-Young (ed.), *Vita Edwardi Secundi*, p. 61.
- 89) *C.P.R.*, 1313-17, p. 421.
- 90) R.R. Davies, *Conquest, Coexistence and Change*, Oxford, 1987, pp. 387-88.
- 91) *RRS*, V, no. 571 (pp. 700-701). 前掲拙稿, 31-34頁。
- 92) ロイドの返信は, J.B. Smith, 'Gruffydd Llwyd and the Celtic Alliance 1315-1318', *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, 26 (1976), pp. 463-78 (at 477-78), 彼の動向については, do., 'Edward II and the Allegiance of Wales', *Welsh History Review*, 8 (1976-77), pp. 139-71 (at 151-52)参照。
- 93) *RRS*, V, no. 58 (pp. 342-343).
- 94) *Ibid.*, V, pp. 62-63.
- 95) *Ibid.*, V, p. 342.
- 96) ダンカンは, 王位継承規定を定めたこの議会でアイルランド侵略が決定されたとみる。A.A.M. Duncan, 'The Scots' Invasion of Ireland', p. 113.
- 97) A.A.M. Duncan (ed.), *John Barbour*, p. 521.
- 98) A. Grant, *Independence and Nationhood: Scotland, 1306-1496*, London, 1984, pp. 3-12; Do., 'Scottish Foundations: Late Medieval Contributions', in A. Grant & K. Stringer (eds.), *Uniting the Kingdom?: Making British History*, London, 1995, pp. 98-99.
- 99) *RRS*, V, no. 301 (p. 560-561). 同じ議会で「ロバート1世の法」と総称される規定が承認されているが, その1つ(21条)にも「不満を表明する者および陰謀をめぐらす者は投獄されるべし」とある。*Ibid.*, V, no. 139 (p. 412). なお, ロバート1世に男子デイヴィッドが誕生するのは1326年である。
- 100) A.A.M. Duncan, 'The War of the Scots 1306-23', *Transaction of Royal Historical Society*, 6th Series, 2 (1992), pp. 129-31.